

経営学部における キャリア教育の実践事例と課題

門脇 徹雄・小野 正人

要 旨

城西大学経営学部では、2011年度よりキャリア関連科目を導入している。本稿では経営学部で実施されているキャリア関連教育について、キャリアデザインの科目とゼミナールの実際の運営状況に焦点を当てて考察し、それらの課題と望ましいあり方を検討した。

第1章では、経営学部における2011年度～2013年度のキャリア入門教育と専門科目の授業の現状を考察した。「キャリア教育は早期に実施した方がより効果が高まる」との仮説を立てて、キャリア教育を1年次から実施してきたが、就職活動に直結した高い効果を求めて、2014年4月から講義内容の改善を行った。第2章では、キャリア教育に対する学生の反応をアンケート調査の実施により教育効果の検証を行った。第3章においては、アンケート結果から明らかとなったキャリア教育における実務的課題を4点指摘した。最後に第4章では、基礎ゼミで行われている1年次の基礎力向上の現状と基礎力診断結果を考察し、基礎力向上を目的とした教材開発や授業の状況を述べる。

キーワード：キャリア教育、キャリアデザイン、就職活動、基礎学力、学生指導

はじめに

城西大学経営学部では、昨今の潮流を背景とした中央教育審議会の審議や大学設置基準の改正^①をふまえて、2011年度より職業観、勤労観の育成と社会的な資質能力形成を目的としたキャリア関連講義科目を導入している。また、後述するように1年次から4年次までのゼミナール科目においてもキャリア指導が含まれるように改正している。これらの科目を軸とした活動がキャリア教育といわれるものであるが、本稿では経営学部で取り組んでいるキャリア教育について現

場の状況を考察し、それらの課題と望ましいあり方について検討していく。

1. 経営学部におけるキャリア教育の取り組み

1.1 キャリア教育の目的

キャリア教育は、大学生に対して将来どのような人生を送りたいかという主体者意識を持つように手助けすることを目的としている。社会に出て行くための学校教育の最終段階にある大学生にとっては、学校から社会への移行にあたり本人の主体的・自律的選択が求められる時であり、職業指導や職業・就職に関する情報提供や相談などの機能が重要になってくる。大学生にとっては、1年次や2年次の早い時期にキャリア教育を受けると、実社会での就業を意識した向上心やモチベーションが高まる傾向があり、それを契機に学生生活を有意義に過ごそうという意識が芽生え、学業のみならず就職活動にも役立つことがある。

またキャリア教育は、大学生に対して、課外のサークル活動や学外でのアルバイト等の生活に目的意識をもって行動する自覚を与える効果も考えられる。一人ひとりの学生の性格・資質・嗜好を注視し、さらに有意義な学生生活を送ることによって社会人としての力が育成されることにも目配りする必要があるのが、キャリア教育のもう一つの特徴である。

1.2 現 状

現在、本学の経営学部全体で2,100名余の学生が在籍しており、そのうち埼玉県・東京都を中心とした関東各県の高等学校から約7割が入学している⁽²⁾。大半の学部生は就職先として民間企業あるいは公務員を希望しており、首都圏私立大学の他の社会科学系学部と比べても大差はない。このような平均的な文系大学生に対して、在学中に社会人基礎力を有し、卒業後に自立し業務遂行能力を持った社会人として人生を歩めるような人材育成が重要であるのは言うまでもない。

本学の経営学部のカリキュラムでは、キャリア教育関連科目として、キャリアデザインⅠ・Ⅱ(2年生向け)、インターンシップⅠ・Ⅱ(2年生向け)、女性キャリア研究(2年生向け)、キャリアデザインⅢ・Ⅳ(3,4年生向け)、ゼミナールⅠ・Ⅱ(キャリア研究含む)などが開講されている。また上記以外にも、行政キャリア研究、スチューデント・インターンシップ等のキャリア教育が行われている講義科目がある。

本稿では、第1章から第3章においてキャリアデザインⅠ・Ⅱ(2年次向け)、キャリアデザインⅢ・Ⅳ(3,4年次向け)、ベンチャービジネス入門Ⅰ・Ⅱ(1年次向け)におけるキャリア教育の実践状況を考察し、次いで第4章でゼミナール(基礎ゼミ)科目における基礎力向上への取り組みについて述べる⁽³⁾。

表1 キャリア関連科目の履修学生数（2014年度）

（単位：名）

科 目	合 計	1 年 生	2 年 生	3 年 生	4 年 生
ベンチャービジネス入門Ⅰ・Ⅱ（1年次向け）	157	117	13	21	6
キャリアデザインⅠ・Ⅱ（2年次向け）	172	—	129	27	16
キャリアデザインⅢ・Ⅳ（3, 4年次向け）	142	—	—	114	28
合 計 A	471	117	142	162	50
経営学部在籍数（2014年5月1日時点） B	2,176	466	616	514	580
上記3科目の履修率 (A/B)	22%	25%	23%	32%	9%

経営学部で筆者（門脇）が担当するキャリア関連科目は表1のような履修状況である。

(1) キャリア入門教育

経営学部においては、1年次向けのキャリア教育入門科目は開講されていない。前述のように、「大学において早期にキャリア教育を受けることが効果を高める」という仮説を立て、筆者（門脇）は1年次学生向けの講義「ベンチャービジネス入門Ⅰ・Ⅱ」において、ベンチャー企業を対象とし、キャリア入門も学べるような工夫を設けて運営している。

ベンチャービジネス入門Ⅰ・Ⅱでは、2013年度まではベンチャー企業を題材にして学びながら、学生生活の送り方、将来の進路や就職に関する知識を付与してきた。ベンチャー企業については、主に起業家が会社創業時にいかに苦労しながら大きな会社に成長させた経緯を、資料に基づく講義やVTRの映像視聴の後に感想文を記述する課題作業を行ってきた。感想文を自分の言葉で書けずにプリントを丸写しする学生が少なからずいたことも事実であるが、授業中にVTRを見ることで、学生は「あの社長の下で働いてみたい」という感触を得て、ベンチャー企業やその創業者に興味を持つ学生も多く見られた。

(2) キャリアデザイン科目の講義内容

次に2～3年次向けキャリアデザインの授業では、2011年度から2013年度までの間は、業界・企業研究、VTRの併用による個別企業の研究や、将来の進路決定や就職活動に役立つESの書き方などの情報提供を行ってきた。キャリア教育から就職活動に役立つ実践的なテキストが皆無だったため、学生自身が企業選定や就職活動のES対策の準備ができる書籍を2012年度より毎年、改訂版を出版し講義で使用している。それらの講義の中では、授業中に「志望動機」や「自己PR」などのエントリーシート（以下、ESと記述）を実際に書かせて添削をすることはほとんど行っていなかった。

1.4 講義内容の変更（2014年4月以降）

前述のような講義を3年間実施してきて、4年次の段階でESの内容を論理的に書くことができない学生が少なくなく、就職活動で支障が生じていることを知り、運営方法を就職活動により直結した実践的な講義内容に改善する必要があると判断した。そこで、2014年4月から、ベンチャービジネス入門Ⅰ・Ⅱ及びキャリアデザインⅠ・Ⅱ・Ⅲ・Ⅳの授業において、次のように講義内容の変更を行った。

前期は従来実施していた感想文ではなく、企業向けの「志望動機」を書かせて、翌週に添削例と模範例を配布してコメントするように変更を行った。後期からは、志望動機に加えて「自己PR」を書かせて、前期同様に添削例と模範例を使って、4年次の就職活動対策も兼ねた実践的な内容に変更した。

(1) 1年次の教育内容

ベンチャービジネス入門Ⅰ・Ⅱでは、2014年度の履修生157名のうち1年生が117名と1年次在籍者の25%であった。前期の前半は1年生以外に履修する2～4年生40名に対しては、民間企業に就職活動を行う際の「志望動機」を書いてもらい、1年生には従来通りの感想文を課した。翌週の講義では2～4年生が書いた「志望動機」の添削例を全員に配付して授業で解説した。慣れてきた頃合いを見て、1年生を含む全員に「志望動機」を書く練習を行った。後期の授業では、「志望動機」に加えて「自己PR」の書き方を説明した後に、1～4年次の履修生全員に書いてもらったものを添削して指導した。

表4のアンケート結果にみられるように、「毎週、志望動機を書くことで、自己成長が感じられる」などのコメントが1年生からあり、また、表5のような意識の変化も見られ、「志望動機」、「自己PR」の授業の効果が表れたものと考えられる。

その結果、かなりの学生が「志望動機」の書くコツを習得したようである。「4年生になるまでには一人ですらすら書けるようになりたい」というモチベーションが高まったコメントも見られるようになり、効果を明確に確認できるようになった。

(2) 2～3年次の教育内容

キャリアデザインⅠ・Ⅱ・Ⅲ・Ⅳの履修生2～4年生に対しても同様に、2014年4月から前期は志望動機、後期は、「志望動機」に加え「自己PR」を授業中に書く練習を行った。

とりわけキャリアデザインの授業では、学生のモチベーションの向上と内定獲得を意図して、「志望動機」、「自己PR」、「大学時代に何に一番力を入れたか？」の3点の対策に力点を入れている。

(a) 「志望動機」対策

業界・企業・職種研究をし、同業他社比較を通して、志望会社の特徴を把握し理解できるようにすること。自己分析によって自分の強みを知り、企業が求める人材像にマッチする会社、自分の適性にあった仕事や社風の会社を選択することを指導している。

(b) 「自己PR」対策

何かに向かって行動する時には、「PDCA」を使って、数字で示せる成果をあげること。P=Plan（計画）、D=Do（実行）、C=Check（検証・分析）、A=Action（改善して実行）。特に、アルバイト、サークル、ゼミナール、ボランティアなどの活動には、必ず目標を立て数字で示せる成果を上げることで、説得力のある「自己PR」が書けるようになる。

授業で学生が書いている「自己PR」をみると、ほとんどの学生がアルバイトを事例にしているけれども、その内容は乏しく、どの学生も同じようなことしか書けない状況であった。実際、一般的な会社の就職試験の書類選考が通らないような内容であったので、アルバイトなど何かをする時は、このような動機と目的を持った論理によって取り組むように指導することが有益と考えられる。

大宮（2011）は、「何か物事を始めるとき、計画を立てて実行する。業務をより良く行い、生産性を上げる考え方をマネジメントサイクルといい、さらにそれをキャリアデザインに当てはめたのがPDCAサイクルとっている。このようなPDCAサイクルを学生のうちから実践することが、社会人としての能力を高めることにつながる。学生時代にアルバイトの仕事に正面から向き合うことで、自分の将来のキャリアを考えるきっかけをつかむことになる可能性が高いと考えられる。

また、太田（2013）は、中堅下位大学の4人の女子学生にPDCAサイクルを使って「突き抜ける経験」をさせて数字による成果を出させたことで、大手企業から内定を獲得した4人の実例を紹介している。

筆者の授業では、この例を踏まえて、レストランでアルバイトしている学生に数字で成果を上げることを意識するように指導したこともある。

食事を終えて満足そうにしているお客に間をみて声掛けをすることを学生に提案する。「今日の食事はどうでしたか？」に対し、「美味しかったよ」とお客が言った後に、「実はお客様が今日召し上がった料理は当店のランキング1位です。実は、こちらがランキング2位の料理で、やはり大変美味しいですよ。次回、来店の際は是非これも召し上がることをお勧めします。」と言うように、声掛けをした客が何人で、そのうち再度来店した客が何人いたかを追跡調査してはどうか？」

(c) 「大学時代に何に一番力を入れたか」対策

ESでは「大学時代に何に一番力を入れたか」という質問も重要な項目であるが、「アルバイト」と回答する学生がかなり多い。しかしながら、アルバイトという答えでは、採用側はその学生が学業に注力していない、あるいは学力不足の可能性があるとして判断されてしまい、書類選考で不合格となるケースが多い。

日経 HR 編集部（2013）は、1, 2年次に充実した学生生活を送ることが就職活動を左右することを強調しており、社会で活躍できる人材に成長するための学生生活の効果的な送り方を、「勉強編」, 「学内活動編」, 「課外活動編」の面から説明している。

学生の本分は学業であり、ESには経営学部の学生であればゼミナールでの活動や簿記、情報技術、TOEIC、卒業論文、資格取得などについて書くのが当然である。授業では、これらの学業のほかにサークル活動、学生団体、留学、国内外のインターンなどを学業と併行して書くように指導している。

2. キャリア教育における学生の反応と行動

2.1 アンケート調査の目的

前章のような発想と施策によって取り組んできたが、このようなキャリア教育の早期実施の効果について、アンケート調査を実施して、早期キャリア教育の効果の仮説を検証しようと試みると同時に、キャリア教育に対する学生のニーズの把握も意図したものである。1~3年次におけるキャリア教育が4年次の就職活動に如何に役立ったかを検証することが目的ではない。アンケートの対象者があくまで現在の履修生に限定したからである。4年次で講義を履修中の12人の大半は4年次に始めてキャリア教育を履修したこと、また履修期間が就職活動の最中であることもあって、効果を測定するには不十分であったことが理由である。

2.2 学生の反応

(1) 一年生の反応

受講者の学生はアンケートに以下のような反応を示した。

ベンチャービジネス入門Ⅰ・Ⅱの中でキャリア入門も学んでいる1年生の反応をみると、回答者98人中97人の学生が「役立っている」と回答している。今の授業がキャリア入門として役立っていないと回答した1名は、高校3年間みっちりキャリア教育を受けてきたので、現在の内容は自分にとって役に立たないというものであった（表2）。

同講義の「受講前と受講後で意識は変わったか？」の質問に、変わったと回答した学生が83

人、変わらないが3人、分からないが12人であった（表3）。「分からない」の回答者の中には、現時点では実感が無いというものが多かった。

「役立っている」理由を筆記形式で回答させた内容には、「向上心とモチベーションが高まった。」「早い段階から、社会性を身に付けることの大切さを実感した。」「毎週、志望動機を書くことで、自己成長が感じられる。」など、初年次教育の大切さを示す貴重な反応が見られたことは注目に値する（表4）。

表2（質問）1年次のキャリア入門教育は役立つか？

1年生	キャリア教育は役立っているか？		
	はい	いいえ	合計
	97	1	98

（注）1年生の履修生117名中、2014年11月10日に出席した98名にアンケート実施。

表3（質問）受講前と受講後で意識は変わったか？

1年生	受講前と受講後で意識は変わったか？			
	変わった	変わらない	分からない	合計
	83	3	12	98

（注）同上。

表4（質問）ベンチャービジネス入門の授業はどのように役立つか？（複数回答可）

N=83

	回答内容	人数
1	1年生のうちから様々な企業について学べるので、自分の将来の進路を決めるのに役立つ。	66
2	企業のVTRを見ることで、職業の外見だけでなく、内面も知ることができる。	62
3	向上心が高まり、1年次から授業を集中して受け、自分が何をすべきかが見えてきた。	62
4	早い段階から、社会性を身に付けることの大切さを実感した。	60
5	企業の職種（仕事内容）を知るのに役立つ（もっと多くの仕事内容を知りたい）。	57
6	1年生から将来について考えると、モチベーションが高まり学生生活がより良いものになる。	56
7	将来、どのような人生を送りたいかという目的意識を持ち、考えるようになった。	53
8	他の授業では学べないこと、身に付かないことやスキルが学べるので、とても役に立つ。	51
9	企業が求める人物像を学び、自分に合っている会社・職種を選ぶのに役立つ。	50
10	他の学生の書いた良い見本を多く見て参考にしたい。	49
11	創業者の話をVTRで聞いて目標が明確になった。志望理由を書くときに役立っている。	45
12	将来やりたい職業について目標を見つけられた。どう貢献すべきかを考えるようになった。	42
13	就活時に必要な文章の組み立て方や相手に伝わる文章の書き方を学べて役立つ。	41
14	アルバイトをしている時に、就活を意識して、何か成果を上げるように働くようになった。	40
15	1年生から志望動機の書き方の練習ができ、就活で他の学生よりも有利になって助かった。	39
16	毎週、志望動機を書くことで、自己成長が感じられる。	37
17	企業・職種研究は、目標を立てるのに役立ち、勉強のモチベーションが上がった。	34
18	大学の授業で唯一就職関連のことが学べるので役立っている。	34
19	自分が書いた志望動機を添削されて、とても分かり易く助かっている。	29

20	自分の強みや良いところを書く自信が付き、1年生でも書けるようになった。	27
21	自分が書いた志望動機を基に質問されると、面接にも役立ってよい。	26
22	今のアルバイト先に何が足りないかが直ぐ見つかった。	23

(注) 1年生の履修生117名中、2014年11月10日の出席者98名に記述式で回答してもらった項目について、同年12月8日の出席者83名に複数回答でアンケートを実施。

「受講後にどのように意識が変わったか？」を筆記形式で書いてもらった中には、「向上心、モチベーションが高まった。」「充実した学生生活を送ろうと決心した。」「2年生になったらキャリアデザインを是非履修したい。」「人生の目標を見つけた。将来の目標がはっきりした。」「PDCAを実践してみようと思った。」などの回答があり、この調査結果はキャリア入門の初年次教育がいかに重要かを示しているといえよう(表5)。

表5 (質問) 受講後にどのように意識が変わったか? (複数回答可能)

N=83

	回答内容	人数
1	向上心、モチベーションが高まった。今自分は何をすべきかを考えるようになった。	63
2	今、何をしておけばいいのか、1年生のうちにするには何かを考えさせられた。	62
3	自分に合った会社に就職したいという気持ちがより高まった。	59
4	就職するには今後どうすべきか、大学生活をどう送れば良いかを意識するようになった。	57
5	これまで漫然と生活してきたのを改めて、充実した学生生活を送ろうと決心した。	56
6	1年生のうちから一つずつ行動することで、身に付き、4年になってから役立つと思った。	53
7	1年次から就職に対する意識・危機感が高まり、今から準備しようという気持ちになった。	52
8	仕事(アルバイトも含め)の仕方や就職についての考えが変わった。	51
9	企業の理念を学ぶことで、社会人になった時のことを考えるようになった。	50
10	最初は有名企業ならどこでもいいとの考えが、自分に合った会社を探したいと思う。	48
11	どのような人材を企業が求めているか、そのために今から何をすべきかを考えさせられた。	47
12	様々な企業を見て就職したいという意欲が高まった。	45
13	志望動機を完璧に書けるように、面接もできるようになりたいという気持ちが強くなった。	45
14	2年生になったらキャリアデザインの授業を取ろうと思う。	41
15	企業についての関心や就職についての興味とやる気が出てきた。	39
16	実際の企業のVTRを見て、創業者の苦心談などが聞けて、自分の考え方が変わった。	37
17	学生生活の過ごし方に変化が出て来て、勉強や本を読むようになった。	35
18	アルバイトを漠然としていたが、授業で学んだことを実践して就職に役立たせたい。	33
19	PDCAなど就職に役立つ話を聞くことができ、実践してみようと思った。	32
20	自分自身の目的意識を持てるようになった。人生の目標や将来の目標がはっきりした。	31
21	企業の見方が変わり、将来、どんな職業に就きたいかが見えてきた。	31

22	教わったことを意識するようになり、自分の目標実現のための行動の内容に変化が出てきた。	28
23	企業がどのような人材を求めているのかを知り、自分の生活ががらりと変わった。	25
24	多くの職種・仕事の内容を知ることで、自分が働きたい所が明確になった。	25
25	将来のことを本格的に考えるようになり、やりたいことが明確になった。	24

(注) 表4に同じ。

2.3 2～4年生の反応

(1) 講義はどのように役立っているか？

2～3年生の反応としては、「向上心が高まった」、「就職に役立つ」「進路決定に役立つ」と、いずれもほぼ同様の回答結果となって表れている（表6）。一方、4年生の反応としては、12人中、就職活動を終えていることもあって、特に役にたっていないと回答した2人以外は、就職活動に役立ったとの回答であった。具体的には以下のようなコメントが見られた（表6）。

「4月にこの授業を受けていなかったら、11月時点でも就職も決まらなかったと思う。志望

表6 キャリアデザインの授業はどのように役立っているか？

質 問	2年生 N=134	3年生 N=113	4年生 N=12
1. キャリアデザインの教育は役立っているか？ はいと答えたもの	124	110	10
2. 履修前と履修後で意識が変わった 変わったと答えたもの	116	106	11
3. どのように役立っているか？（複数回答可）			
① 向上心が高まった	65	59	3
② 就職に役立つ	92	93	9
③ 進路決定に役立つ	44	35	1
4. どの講義内容が役に立ったか？（複数回答可）			
① 業界・企業・職種研究	68	58	5
② 志望動機・自己PRの書き方・添削	91	101	10
③ 筆記試験対策	43	24	
④ 面接対策	37	39	1
5. もっとやって欲しかったことは？（複数回答可）			
① 業界・企業・職種研究	50	43	4
② 志望動機・自己PRの書き方・添削	27	34	
③ 筆記試験対策	34	38	4
④ 面接対策	35	43	3

(注1) 質問1～3は2014年11月10日と12日に実施。質問4～5は同年12月8日と10日に実施。

(注2) 表6の履修者数が、表7の履修者数と一致しないのは、ベンチャービジネス入門などの履修者も含まれているためである。

動機や自己PRの正しい書き方も分からないままだった。もっと早く履修しておけば良かったと後悔している。」

「キャリア教育を受けていなかったら、今の企業から内定はもらえなかったと思う。2年次の時に履修していて良かったと思った。」「キャリア教育を早くから受けることにより、3、4年次になった時、就職活動に役立てることが出来たと思う。」

(2) 役立った講義内容

どの講義内容が役に立ったか？（複数回答可）との質問に対し、2年生では、「業界・企業・職種研究」が3年生よりも回答数が多かったのが特徴である。2年次の時点では、「どの業界に進むか？」「どのような企業があるのか？」「どんな仕事があるのか？」分からない状態にある学生が多いことを示唆しているものと思われる（表6）。

12月からミニテスト形式で、毎時間行っている「筆記試験対策」を評価する回答が2年生の方が多かったのは、授業の中で、「筆記試験対策は3年からでは遅すぎる」と、筆者が繰り返し強調していることの表れかもしれない。

(3) もっと力を入れて欲しかった分野

2年生から最も要望の高かった分野が、「業界・企業研究」及び「職種（仕事内容）研究」である。授業では個別企業の属する業界の概況を説明しているが、現在のキャリアデザインの授業では、多くの業界をカバーするには時間的な制約があることは否めない状況にある。今回のアンケート結果は、2～3年次に「業界研究」や「職種研究」に重点を置いたカリキュラムの必要性を示唆するものと思われる（表6）。

3年生からの要望では、2014年12月から「インターン」という名の下で就職活動が開始していることもあって、「業界研究」と「面接対策」に力を入れて欲しかったとの回答が多かったのが特徴的である。

(4) 履修時期

2年次のキャリアデザインⅠ・Ⅱの履修者129人中、アンケートに回答した91人の内訳は、40人は1年次にベンチャービジネス入門Ⅰ・Ⅱの履修時に、キャリア入門の教育を受講済みである。残りの51人は2年次で初めてキャリア教育を受講する学生である。これらの回答者91人中、58人（64%）の学生が1年次にこのキャリアデザイン講義を履修したかったと答えている（表7）。また、3年次の履修者162名のうち出席者101人中、1年次に52人（51%）、2年次に35人（35%）、合計87人、実に86%の学生がもう1～2年早く履修すれば良かったと回答している。

表7 (質問) 今のキャリア科目を何年次に履修すれば良かったか？

年次	合計	1年次	2年次	3年次
2年生	91	58 (64%)	33 (36%)	—
3年生	101	52 (51%)	35 (35%)	14 (14%)
4年生	10	3 (30%)	4 (40%)	3 (30%)
合計	210	113 (54%)	72 (34%)	17 (8%)

(注) 調査実施日は2014年12月8日および10日。

4年次になって初めてキャリアデザインの科目を履修した学生の反応は、「もう1年早く履修していれば、もう少し良い就職活動ができた」、「もっと早くこの授業を受けていたら、ここまで悩まずに自分の進むべき道を見つけられたと思うと、もったいないことをしたと思った」、「大学に入学した時に、4年次の就職活動にはこのような科目を履修すると良いとアドバイスして欲しかった」と回答する学生もいた。今後はこのような学生を減らしていくことも課題であろう。

2.4 就職活動の失敗事例

児美川(2013)は、多くの学生が卒業して、入社時に本当にやりたい職業に就いている人はごくわずかで、多くの人が紆余曲折を経ている現状からみて、「夢」、「やりたいこと」や「就きたい職業」探しに重点を置いている現在のキャリア教育の限界を指摘している。筆者(門脇)自身をみても、日本、カナダ、アメリカ、日本と10回以上の転勤・転職を経てライフワークとなる職業に巡り合ったのは48歳の時であった。

以下では、筆者の授業を3年間履修した4年生の就職事例を2件紹介するが、2人はいずれも第一志望の会社を失敗している。スペースの関係で紹介できなかった他の3人の女子学生も同様であった。ところが、彼らは「第1志望ではないが、自分が入社すると決めたからには頑張るしかない。」という気持ちをもっており、彼らの将来に期待することにした。

① 筆記試験での失敗

学生A(女子)は筆者の授業を3年間履修したが、ESを自分でしっかりと書くことができない。また筆記試験の中でも特に算数ができない。一方で、居酒屋で4年間アルバイトを続けており、常連客を増やすために客の顔や名前、やりとりを覚えて、次の来客でフォローすることを続けてきた。このようなアルバイト経験の中で社会人と対話することが得意となっており、就職活動における面接試験はすべて合格した。

しかしながら、第一志望であった建設会社では、社長面接を通過した後に行われた筆記試験で不合格になった。その後に、筆記試験のない自動車販売会社から内定を得たものの、本当に入りたかった会社にあと一步のところまで筆記試験で落ちてしまった。

② 職種選択の失敗

学生 B (女子) は筆者の授業を 3 年間、履修したが、ES を自分一人では満足に書くことができない。しかし、ポイントを指摘してもらえば自分で ES 作成に取り組むことができる学生である。B は中学生向けの学習塾で教師のアルバイトをしていることもあって、基礎学力、一般常識の知識は十分にあるため、筆記試験は全て合格。普段から人前で話しているため、面接試験でも受け答えが上手にできる学生であった。問題は能力的に総合職並みであるが、転勤のある総合職では、将来は結婚後の勤務の継続が難しくなる、という理由で一般職を志望したことである。企業側からすれば、「総合職よりも能力がある一般職では使いにくい」という理由からか、いつも最終面接で不合格となった。

筆者が勧めた九州と東京の 2 本社制のクレジットカード会社の総合職で内定を得たが、九州の本社には行きたくないとの理由で 10 月 1 日までに内定を辞退するつもりであった。ところが、同社が大手 IT 企業に買収されて、本社も東京の六本木に移転することが決まり、B 自身の希望が叶えられるようになった。まったく意図せざる逆転劇であった。

3. キャリア教育における実務的課題

以上でみてきたように、学生は入学直後から「就活は 3 年からでは遅すぎる。自分はどのような人生を歩むのかを考えて学生生活を送る」という意識づけが重要なことを実感する。そのためには、1 年次のオリエンテーション時などで「キャリア履修モデル」を配布して説明するなどの配慮が必要かもしれない。

3.1 一年次におけるキャリア入門教育

1 年次において、ベンチャー企業を学びながらキャリア入門も学べることで、「自分は将来どのようなキャリアを目指すのかを考えて学生生活を過ごすモチベーションが高まった」ことが、表 4-5 (前掲) のアンケート調査でも明らかである。キャリア入門編を 1 年次の必須科目の中に盛り込むことも、1 年次の全学生への意識付け向上に資するものとする。

また、もっと詳しく学びたいという学生にはキャリアデザイン I・II という科目が 2 年次に配置されていることを周知させ、1 年でも早くキャリア教育を受けた方が就職活動に有利になることを認識させることが必要である。そうすることで、先に述べた 4 年生のような事例は少なくなるであろう。

3.2 履修生増加対策

3年次でキャリアデザインⅢ・Ⅳを履修しているのは114人で、キャリアデザインⅠ・Ⅱなどの履修者48人を合わせても162人と、3年次在籍者の32%しか履修していない。残りの約350人は授業でES作成の訓練を受ける機会を逸していることになる。

少なくとも多くの学生が3年次にキャリアデザインの授業を1年間受けることで、就職活動の準備を最小限満たすことができるであろう。つまり、3年次でキャリアデザインⅢ・Ⅳの履修生が増えれば、必然的に内定率の向上に好影響が考えられる。これからは2015年4月より履修生を増やす方法として開講日を現状の週1回から2回に増やしたこともあり、3年生の履修機会が増えることとなる。

3.3 就職活動に直結したキャリア教育

就職活動への準備を強化するために2014年4月から実施したキャリアデザイン科目の運営方法の変更によって、以下のような課題が浮き上がってきた。

① ESの実践練習

2014年4月から変更した授業方式により、授業中に実際にESを書く練習を最低でも1年間継続すれば、完璧なESが書けなくても、ゼミナール担当の教員、就職課のスタッフや筆者に指導を要請することで書類選考を通る水準のESは書けるようになるであろう。

② 筆記試験対策

2014年12月から、1年次から3年次の授業において、毎回のミニテストにSPI3用「筆記試験」問題を入れて対策を講じ始めている。中学履修レベルを基準に作成した国語、算数、英語、一般常識問題に、学生は年次に関係なく多くの間違いを犯しており、基礎学力の不足が明らかである。4年生の多くから「筆記試験のある会社は受けたくない」と耳にしているが納得できる。基礎学力や一般常識を問う「筆記試験」があるからといって排除しては、折角の就職の機会を自分で閉じてしまうことになる。内定率の向上を図るには、基礎ゼミⅠ・Ⅱを含め、キャリア関連科目でも基礎学力の向上対策を講じるのが急務と考える。

③ 面接対策

授業中に学生から質問を受けることはほとんど皆無である。また、学生に質問してもわからないとも言わずに、ただ「だんまり」を押し通すような学生が多く見られる。それであっても、学

生からは授業中に面接練習を行ってほしいという要望が多く寄せられている。とはいえ、100人以上の大きなクラスでは面接練習をする人数に制約がある。

2014年度の前期では、学生が書いた「志望動機」など文章の添削は、授業後に希望者に対し一人ずつ個別に対応してきたが、対応人数にはおのずから限度があったのが実情である。後期では、面接対策として授業中に書いてもらったESをもとに学生に質問する面接形式を採用した。また、1年次の授業でも面接対策を実施したところ、今までは一方通行気味であった授業が双方向となり、授業が活気づき学生もやる気が出てきたように思われる。自分が書いた文章について皆の前で質問されて、最初は緊張していた1年生も徐々に慣れて楽しみを感じる人も出て来て、学生からも好評である。自分の書いた文章を人前で訂正されることに若干抵抗のある学生がいるのが難点ではあるが、これを1年次から継続することによって、内定率の向上が期待できる。

3.4 業界研究の必要性

就職活動を効果的に行うには、業界研究、企業研究、職種研究が必須である。キャリアデザインⅠ～Ⅳの授業においては、個別企業が属する業界の概況、個別企業の研究とその企業への「志望動機」や「自己PR」の作成練習と添削にかなりの時間が割かれている。本格的な業界研究にまでにはなかなか手が回らない状況にある。

それもあってか、学生からはもっと「業界研究」に時間を割いて欲しいという要望が寄せられている（前掲、表6）。学生に業界と会社の実情をより深く研究させ、同時にキャリアデザイン科目との連携を図るためには、製造業・流通業・サービス業・金融業等のセクター別に、学生に早期に基礎的な項目を着実に学習させる講義を充実させるカリキュラム改善が必要と考えられる。

4. ゼミナールにおける基礎力向上の取り組み

4.1 現 状

2004年の開設以来、経営学部では1年から4年までゼミナール科目を設置し、1年次は基礎ゼミⅠ、2年次は基礎ゼミⅡ、3年次から4年次は同一教員によるゼミナールⅠとⅡの4コマのゼミナールを必修科目としている。すなわち経営学部生全員がゼミナールに所属し（1、2年次は基礎ゼミに所属）、ゼミ担当教員とのやりとりの中でマネジメント人材の育成を図っている。

前述したように、経営学部では複数設置したキャリアデザイン専門科目においてキャリア教育を行っているが、それらと並行して上記のゼミナール科目でも、各ゼミ科目の名称の後に「(キャリア研究を含む)」という副題をつけることでゼミナールをキャリア教育の一つと位置付け、1年次のゼミナールから4年次まで基礎力やコミュニケーション能力等の卒業後のキャリアを意識

した実務力の向上教育と就職試験の準備、指導、フォローアップを行っている。以下では、上記のゼミナール科目の中で実施しているキャリアデザイン教育を概説するとともに、現状、取り組み、および今後の課題について論じる。

昨今、各大学は大学生の基礎学力低下を大きな課題と受け止めている。たとえばクルートマーケティングパートナーズの2013年調査によると⁽⁴⁾、全国の私立大学学長の93.7%が「学生の学力に課題がある」と認識しており、このうち31.9%の学長は「大きな課題」としている。一方、採用する企業側でも近年は就活学生の基礎学力を重視する傾向が強まっている。既に企業の採用試験における適性検査は一段と浸透しており、面接の前段階で応募者の絞り込みの役目を果たすようになった。就職活動を準備する学生にとっては、基礎学力の欠如は次のステップに進めないことを実質的に意味している。

逆に考えれば、それだけ日本全体における若者に定着した能力構造であるだけに、局所的な対応で済むものではなく、相当な資源を各所に投入し中長期的な時間軸で取り組む中で基礎学力向上の成果が獲得できるという課題のように思われる。とはいえ、大学のミッションは専門教育、研究、および高等教育に相応しい教養教育が軸となっており、基礎学力に関する教育は昨今取り込まれつつあるとはいえ、依然として大学では正面から資源を投入して取り組まれているとはいえないのが現状である。

4.2 基礎力の測定とフォローアップ

基礎学力向上が実社会の業務能力につながる課題とはいえ、教育現場は学生それぞれの状況に個別に対応せざるをえない。本学経営学部でも基礎学力とキャリアデザイン教育の充実を方向づけているが、具体的な教育内容は各教員が学生の状況に応じて考案し指導している。表8は、筆者（小野）のゼミにおいて1年次の最初と最後に実施した基礎学力診断の結果であるが、以下のような特徴を読み取ることができる。

第一に、対象者（1年次履修者）全体として基礎学力の不足が明らかである。具体的な問題内容は省略するが、中学校から高校1年で履修するレベルを基準として作問しており、国語（漢字の読み・書き、語彙、慣用句、ことわざ）・数学・地理・時事問題の合計70問である。平易な基礎問題という感覚で作問したものが、対象者の平均点は1年次最初と1年次末のいずれの診断テストも40%台、最高でも70%台という結果であった。残念ながら、中学履修レベルの基礎力は定着していないことが明らかである。また、基礎力にはバラツキがあることもはっきりしている。

第二に、対象者の平均点は向上していない。1年次の基礎ゼミIや他科目において基礎力強化の教育を実施しているものの、1年次末の基礎力診断結果をみると、設問の難度差は修正していないものの、平均点はむしろ小幅ながら下落している。これをみても、基礎力向上の取り組みは

表8 1年次基礎ゼミIにおける基礎力診断（結果一覧）

(1) 入学後1年次（2013年4月実施）

N=24

	問題数	正答率		
		平均点	最高	最低
国語Ⅰ（漢字の読み・書き）	20	52%	85%	30%
国語Ⅱ（語彙、慣用句、ことわざ）	20	46%	75%	20%
数学	10	33%	90%	0%
地理	10	33%	100%	10%
時事問題	10	47%	80%	20%
（合計）	70	44%	74%	36%

(2) 1年次末（2014年1月実施）

N=23

	問題数	正答率		
		平均点	最高	最低
国語Ⅰ（漢字の読み・書き）	20	49%	80%	20%
国語Ⅱ（語彙、慣用句、ことわざ）	20	46%	70%	25%
数学	10	35%	80%	10%
地理	10	35%	90%	20%
時事問題	10	41%	80%	10%
（合計）	70	42%	75%	28%

(出所) 2013年度基礎ゼミIにおける基礎力診断テスト。

短期間で成果が得られるものではないことが実感できる。

4.3 教育内容の改善と教材開発

大学の初年次教育において、多くの大学で基礎力向上の取り組みが行われているようであるが、一般教養の講義科目や経営学・経済学・社会学などの社会科学の各専門科目のように教育内容や体系が一般化して定着しているわけではない。中学校・高等学校の教育内容や教科書・参考書等を参考にしながら、各大学の教員達が手さぐりで試行錯誤しながら実行しているのが実態であろう。実際、そのような大学生向けの基礎力向上を目的としたテキストや参考書類がほとんど刊行されていないことからそれが想像できる。

経営学部においては、筆者（小野）が2012年度より基礎力向上を目的としたテキストブックを作成して使用している。「基礎ゼミⅠ」（1年次を対象）、「マクロ経済学入門」と「ミクロ経済学入門」（いずれも1年次以降を対象）の授業においてテキストブックを配布している。基礎ゼミⅠで使用している「経済経営基礎500語」（図1・左）は、中学校（公民）・高等学校（現代社



図1 基礎力向上を目的とした教材

会および政治・経済)の授業で登場する用語を500語選び、それらを解説した後に「用語を3回筆記させる」作業を行う内容である。また、マクロ・ミクロの経済学入門の講義用に作成したテキストブック(図1・右)は、テキストの中に登場する経済用語の約半分が高等学校(現代社会および政治・経済)の授業で登場する経済関係用語となっており、高校の復習(内容確認)をした上で、経済学の基礎を学ぶというスタイルで編集した内容となっている。

これらのテキストブックが1年次の大学生にどれだけの効果をあげているか、件の学生にとって有益で好評なのかどうかについては、明確な結果を得てはいない。大学生向けの基礎力向上を目的としたテキストが無の状態から現時点につなげたことには意味があるものの、今後は学生にとって面白く有益であるかどうかを現場で検証しながら改善に努めて今後につなげていく必要がある。

むすびにかえて

本稿では、2011年度から導入されたキャリア入門教育及びキャリアデザイン科目の教育の実情を考察した。その結果、キャリア教育の課題や望ましいあり方が浮き上がった。

まず、第一に、「キャリア教育は1年次から開始するのが好ましく、早く始めるほど就職活動に与える効果は大きくなる」という仮説が、アンケート結果で実証されたものと思われる。第二に、1年次から基礎ゼミ等において基礎学力を向上させることで、筆記試験対策にも寄与し就職活動に好影響を与えることはいうまでもない。第三に、キャリアデザイン科目の受講生を増やし、

就職活動に直結した教育を2,3年次に受けさせることで、就職活動に必須のES対策が図られ、就職率の向上が期待される。最後に、学生に業界と会社をより深く研究させ、同時にキャリアデザイン科目との連携を図り、相乗効果を高めるには、製造業・流通業・サービス業・金融業等のセクター別に、学生に早期に基礎的な項目を着実に学習させる講義を充実させるカリキュラム改善が必要と考えられる。これらの講義は学生の業界・企業選びに大きな手助けとなることが期待できよう。

大学のキャリア教育を一言でいえば、「目的合理的」な教育である。キャリアに関する講義は、従来のアカデミズムの価値観とは離れて、学生それぞれが持っている現実的な期待に応える内容でなければならないはずである。この観点からは、カリキュラムと講義を構築・設置するだけでなく、学生それぞれが抱える学力と人間力を中心としたさまざまな課題を実際に逐次向上させないことには成果が得られたとはいえない。本稿ではキャリア教育の難しい現実と課題を示したが、今後もそれぞれの現場において学生からの視線をもって取り組んでいく所存である。

〈注〉

- (1) 改正された大学設置基準(2011年4月施行)では以下の条文が新設された。
第四十二条の二 大学は、当該大学及び学部等の教育上の目的に応じ、学生が卒業後自らの資質を向上させ、社会的及び職業的自立を図るために必要な能力を、教育課程の実施及び厚生補導を通じて培うことができるよう、大学内の組織間の有機的な連携を図り、適切な体制を整えるものとする。
- (2) 本学経営学部の在籍学生数は2014年5月1日時点で2,176名。
- (3) 第1章～第3章は門脇が担当し、第4章は小野が担当した。
- (4) 株式会社リクルートマーケティングパートナーズ「入試制度に関する学長調査(2013)」2014年1月発表による。

参考文献

- 1) 大谷晃也「文科系学生の数学の基礎学力と退学率、就職率」研究論集、関西外国語大学、Vol.82、2005年8月、pp.191-197。
- 2) 太田芳徳『リクルートを辞めたから話せる本当の「就活」の話 無名大学から大手企業へ』PHPビジネス新書 PHP 研究所 2013年 pp.123-139
- 3) 大宮登監修『キャリアデザイン講座』日経BP社 2011年 pp.144-145
- 4) 門脇徹雄『優良成長企業の見抜き方(2014年度版)』一ツ橋書店 2012年
- 5) 門脇徹雄『優良成長企業の見抜き方(2015年度版)』一ツ橋書店 2013年
- 6) 門脇徹雄『成長企業の見分け方(2016年度版)』一ツ橋書店 2014年
- 7) 児美川孝一郎『キャリア教育のウソ』筑摩書房 2013年 第1章～第2章
- 8) 日経HR編集部編著『大学1,2年生の間にやっておきたいこと 学就BOOK(第3版)』日経HR 2013年 第2章、第4章～第7章

Study on the Practice Cases and Desirable Instruction for Career Education in Faculty of Business Administration

Tetsuo Kadowaki and Masato Ono

Abstract

Since 2011, career oriented subjects had been introduced in Faculty of Business Administration, Josai University. This paper was focused to discuss actual instruction of career design subjects and first year seminar concerning career oriented education in Faculty of Business Administration. Career education during year 2011 and 2013 was described in the first chapter. Being based on the hypothesis that the earlier career education is more effective for the job hunting activities, introductory career education has been introduced to the first year students. However, as the results were limited, the lecture contents were changed for more effective results in April 2014. In the second chapter, the effect for career education was verified by conducting questionnaires. The third chapter pointed out four areas as practical instruction for career education. Finally, the fourth chapter presented basic academic skills and their results for the first year students and also development of teaching materials for the purpose of improving basic academic skills.

Keywords: career education, career design, job hunting activity, basic academic skills, student guidance